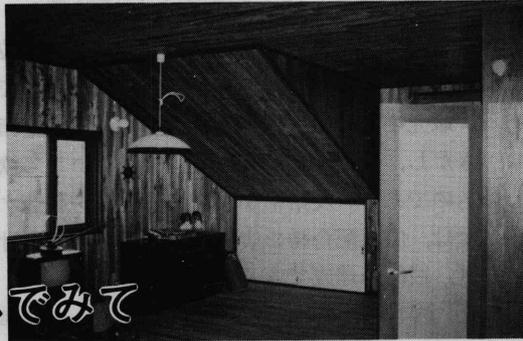


北海道住宅をめざして

北の暮らし研究会

副代表 菅井弘明

カラマツを使った家に住んでみて



北海道住宅をつくった動機

以前から北海道の住宅を見て、これは内地の家づくりであって、寒冷地向けの住宅ではないと思う事が多く、疑問を抱くのが常だった。例えば、複雑な屋根の形、アルミのサッシ、冬期間の結露や水道管の凍結事故の多発、そしてベランダいっぱいのガラス戸など、まだまだ、その疑問は続くのである。

そんな中、旭川市の北欧視察団の一員として、2年前、北欧4カ国を訪問する機会を与えられた。彼らの住宅を見て、大きなショックを受け、800年の歴史の重さをこの肌で感じざるを得なかった。木材や断熱材をふんだんに使い、壁の厚さは300mm。フィンランドの人口は日本の25分の1だが、断熱材の使用量は日本で使われる断熱材の総量に匹敵するといわれる。ストックホルムの市役所で、建築指導課に当たる所で質問してみた「こちらでは、結露の問題はいかがですか?」。その答えは「それは住宅とはいえません」。愚問だった。

北海道は、やはり内地文化そのものであり、出稼ぎ文化だと自嘲気味にもなった。しかし反面、我々は、すでに土着の北海道人であり、何かをしなければならないという気持ちも湧いてきたのも事実である。

自立する北海道経済の為に

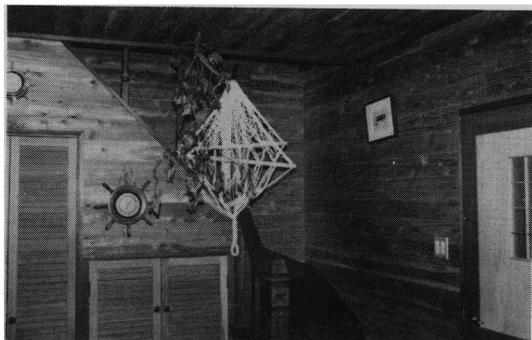
帰国して間もなく、せっかちな私は北海道独自の住宅建築を計画した。冬快適でトラブルの生じないこと、出来る限り地場産品を使うこと、省エネルギーであること、これが設計の基本。

この為に考え出されたのが、構造材にはレンガブロック、壁材にはカラマツ、窓は木製サッシ、そして暖房には、独自に考案したダンロペチカであった。

さて、そのカラマツだが、建築屋に聞くと、ねじれるしび割れする、ヤニが出るから感心できないという。しかし我々の周りを見るとカラマツ林が非常に多い、あれは落葉キノコの為にあるのだろうか。北海道に植えられている20年前後のカラマツは、全国の50%の量になるといわれている。これは一体どういう事なのだ。林産試験場を訪れたのはちょうどそんな時である。そこでは、間伐材を利用して立派な製品が開発されていた。窓、ドア、家具、そして私の求めていた羽目板等である。心配されていたねじれ、ヤニの件については、脱脂処理法を開発して解決されている。

木目の美しさやフシが、素朴さと自然な味わいを感じさせてくれるのを見て、私は玄関をはじめ、居間、サウナ、ユーティリティ、トイレ、子供室等かなりの材料を採用する事にしたのである。壁、天井を含めて約150m²位であろうか。試験場の管財課の方に「これは何軒分ですか?」と聞かれた事を覚えている

健康的で温かく、木材としては安価な、このカラマツ材を、仮りに一軒の家で20万円使用した場合、旭川全体で約8億円(年間4,000戸の新築)の金が動く。全道的に見た場合はどうであろう。さらに大きな経済効果が波及する事は明らかであり、まして家全体に地場産品を利用すれば、それは計り知れないであろう。



木材の果す役割

火災から我々を守る

木材が使われなくなった理由には、いろいろあると思う。新建材の普及、高価、消防法、その他が考えられる。私は友人のマンションを時々訪問するが、その度にいやな気分させられるのが、あの鉄製のドアであり、その閉まる際の音である。「ガシーンッ」、まるで牢屋ではないか。

消防法には、それなりに理念があり、否定するわけではない。それなら、あのドアを不燃材を中心にして木材でサンドイッチした物を使用してはどうだろう。住人も心温まる思いをするはずだ。全国で発生する焼死者の数は、年間約2,000名である。道内でも約140名の方が犠牲になっており、自殺者を除くその半数は、石油製品等の建材による一酸化炭素中毒死と報告されている。

木材は確かに燃えやすいのが特徴だ、しかし表面が炭化すると、それ以上は燃えにくいというし、有毒ガスも出さない。私のカラマツ燃焼実験では、燃えるにしたがってパチパチと木のはじける音が物すごい。すなわち寝こんだのち発生した火災にも、目をさまさずにいられない特徴を持っている。さらにアルミサッシと木製サッシの熱伝導率は500倍ちがうと言われ、その延焼実験ではアルミサッシの方が延焼率が高いという実験データもある。燃えるがゆえに不使用を決め込むのは錯覚であり、むしろ火災から我々を守るのは木材ではないのか。言い換えれば、火災の時に、逃げられる余裕を与えてくれるのが木材といえよう。

暖房効果

先に述べたよう、北欧の住宅の壁厚は300mmが普通になってきた。では昔はまだ薄かったかというそうではない。内容が変わっただけである。ストックホルム近郊にスカンセン公園がある。そこに400年前のスウェーデン北部の農家が保存されている。その農家の壁構造は、外側から200mm角の木材を組んで積み上げ、その内側に乾燥したコケを100mm張りつめ、そして内装材として木の羽目板25mmで仕上げている。壁厚合計325mmである。それほどまでにする気候風土が、その背景にある。北海道はその点めぐまれている。夏には内地に負けないほど暑くなる。しかし冬には北欧に負けない位、寒くなる。それがゆえ、寒さのきびしい時でも「もうすぐ、温かい春がくる」という観念が、冬の寒冷対策をおろそかにする要因の一つになっている。半年間も雪の顔を見ながら暮らす我々は、その快適さを求めるためにも、もっと木材を使うべきである。なぜなら、木材は通常断熱材の倍以上の効果を持ち、その木肌は、人間を落ち着かせ、温かい光を反射させてくれるからである。

空気調整

以前には気が付かなかった現象だが、木材の呼吸によって、室内空気がやわらかく、そしておいしくなる事に驚いた。最近ホテルに泊まるケースが増えてわかった事だが、その原因はどうやら木材が室内湿度を調整している事にあるようだ。湿度計を注意して見ていると、常時65%内外を指している。さらに、おいしく感じるのは、木材からかもし出される香りの精の存在のためかも知れない。専門家に言わせると、我が家全体でバケツ一杯の水が木材によって呼吸されるという。友人の医者が遊びに来てこんなことを言っていた。「この家では、ぜんそくにならないし、むしろ、ぜんそくが治る家だなあ」と。

冬になると、マキを割ったり、石炭を運んだり、大変な様に見られるが、我が家族は楽しんでいる。サウナに入って、ダンロペチカの火を見ながらかたむける冬の夜の酒は、最高である。